

において、入籍をちょっとわきにおいたようではあるが、両者の関係は、「はぶいた」後も消えていない。

つまり、「はぶいた」後、「のぞいた」後に、全体と部分の関係が保たれるか否かということが、二語の行為後の変化の差異である。

また、次の例文では、「のぞく」独特の意味あいが出ていると思うが、これも「のぞく」ことによって、AとBを無関係にしようとしているといえよう。

(43) × 道路から 障害物を はぶく。

(44) 道路から 障害物を のぞく。

(45) × ジャマ者は はぶけ。

(46) ジャマ者は のぞけ。

二例とも、邪魔なものを取り去ることを意味している。道路にとって、またある組織にとって、障害物・ジャマ者は、関係を絶ちたいものなのである。(46)は、派生的用法であり、暗に「殺す」ことを意味しているのだから、「のぞいた」後ジャマ者は当然、誰とも、どことも関係をもたなくなる。「撤廃」という意味あいには、このように「のぞく」のみにあり、「はぶく」には

ない。

3. まとめ

「はぶく」

ある物事から何かを、加える必要のないものとして、除去すること。「はぶく」時は、対象のみではなく、全体に着目している。ある部分を「はぶい」ても、それと全体との関係は保たれる。「節約」という意味をもつ。

「のぞく」

ある物事から何かを、取り去る必要をもって除去すること。「のぞく」時は、とりのぞく対象に着目している。ある部分を「のぞく」と、その段階で、「のぞかれた」部分と全体との関係はきれる。「撤廃」という意味をもつ。

言語経歴：1959年3月東京都豊島区生。

3歳～埼玉県富士見市在住。

かわる・変化する・ばける

堀場 千鶴子

1. 変化動詞の基本構造

変化動詞に分類することができると思われる「かわる・変化する・ばける」について、それぞれの変化のあり方の違いを調べてみようと思う。

すべての変化動詞の基本構造を、 $\langle X \rangle$ (変化するもの) が $\langle -Y \rangle$ という状態 から $\langle +Y \rangle$ という状態 へ (変化動詞) というように考える。ここでの助詞、ガ・カラ・ニは、それぞれ、変化するもの、(変化の状態の) 出発点、到着点を表わしたもので、ガ・カラ・ニのみがこの位置にくるというものではない。どのような助詞がこの位置を占めるかも考察の対象にしようと思う。

2. 「かわる」の二分類

「かわる」には二つのタイプが考えられる。

(1) 運転が 父から 私に かわる。

(2) 風が 北風から 南風に かわる。

この二つのタイプの識別を私は次のように考えた。

それぞれの $\langle -Y \rangle$ が、ガ格をとると、

(3) × 父が 私に かわる。

(4) 北風が 南風に かわる。

のようになる。

(1)を変形した(3)は認めることができない。それは、(1)の方が、「運転」をするという項目に、具体的な $\langle -Y \rangle$ 、 $\langle +Y \rangle$ が対応するという該当関係を表わしているのに、(3)の方では、その前提となる「運転」という項目が欠落し、出発点である $\langle -Y \rangle$ が、到着点 $\langle +Y \rangle$ に移行することを表わしているためである。

それに対し、(2)の方は、 $\langle X \rangle$ というものが、 $\langle -Y \rangle$ 、 $\langle +Y \rangle$ でどういう状態にあるかが表わされており、そのような関係の $\langle -Y \rangle$ は、 $\langle X \rangle$ がなくなっても、ガ格をとり得る。

前者のように、出発点 $\langle -Y \rangle$ が、ガ格になり得ないものを「かわる₁」、後者のように $\langle -Y \rangle$ が、ガ格になり得るものを、「かわる₂」と名付けよう。

3. かわる₁・変化する・ばけるの比較

(5) 父に かわって 私が お客さんを 案内する。

(6) × 父に 変化して 私が お客さんを 案内する。

(7) 父に ばけて 私が お客さんを 案内する。

(5)と(6)について基本構造にそって考えてみよう。まず<X>に相当するものは、「私」である。<-Y>に相当するものは、「父」である。<+Y>に相当するものも、この場合、「私」であると考えられる。これらの例文においては、<X>と<+Y>とが一致している。(7)は、ちがった構造になっている。「ばける」については、後述しよう。

それでは、<X>と<+Y>が違う場合はどうだろうか。

- (8) 途中で 運転が 父から 私に かわる。
- (9)^x途中で 運転が 父から 私に 変化する。
- (10)^x途中で 運転が 父から 私に ばける。

このような文型では、<X>は、「運転」という行為を表わす内容になっている。ところが(8)は、次のように変形することもできる。

- (11) 途中で 私が 運転を かわりましょう。

この場合<X>は、ヲ格もとり得る。ところが、このような例文は、次のようにも変形できる。

- (12) 父に かわって 私が 運転する。

(12)は、(5)~(6)と同じ構造と考えられる。つまり、(12)の<X>は、「運転」ではなく、「私」であるというように、(11)と(12)では、<X>に該当するものが変わってくる。この違いはどのように考えられるだろうか。たとえば、(5)の「お客さんを案内する」を名詞化すると、(13)(14)のようになる。

- (13) お客さんの案内が 父から 私に かわる。
- (14) 私が お客さんの案内を かわりましょう。

以上から、(11)と(12)の違いは行為の内容を表わす語を名詞化できて、「かわる」の構成成分にとり入れられるかどうかにあるといえる。

また、<X>と<-Y><+Y>とが次のような関係にあるものもある。

- (15) 四月から ぼくたちの先生が A先生から B先生にかわりました。
- (16)^x四月から ぼくたちの先生が A先生から B先生に変化しました。
- (17)[?]四月から ぼくたちの先生が A先生から B先生にばけました。

(8)~(10)の<X>が「運転する」という行為の内容を表わしているのに対して、(15)~(17)の<X>は、あるポジションの名称を表わしている。これら両<X>は、<-Y>から<+Y>にかわったという点では、共通している。しかし、(8)の<X>は、(11)のようにヲ格をとり得たが、(15)の<X>はヲ格をとらない。

- (18)^x四月から B先生が ぼくたちの先生を かわ

る。

だが、(8)から(12)に変形したと同様に(15)を次のように変形することはできる。

- (19) 四月から A先生に かわって B先生が ぼくたちの先生になる。

また、(5)、(12)、(19)は次のような助詞もとり得る。

- (20) 父と かわって 私が お客さんを 案内する。
- (21) 父と かわって 私が 運転する。
- (22) 四月から A先生と かわって B先生が ぼくたちの先生になる。

ところが「と」を用いて、(7)の意味は表わせない。

- (23)^x父と ばけて 私が お客さんを 案内する。

以上の例文の<X><-Y><+Y>がどのようなあらわれ方をするかをまとめると、次表のようになる。

	<X>	<-Y>	<+Y>
かわる・ばける	が	(から)	(に)
か わ る	を	から	に
"	を		が
"	(<+Y> と同)	と、に	が

4. かわる₂・変化する・ばけるの比較

- (24) 季節によって 山の景色は いろいろに かわる。
- (25) 季節によって 山の景色は いろいろに 変化 する。
- (26) 季節によって 山の景色は いろいろに ばけ る。
- (27) 風が 北風に かわったので 急に寒くなる。
- (28) 風が 北風に 変化したので 急に寒くなる。
- (29) 風が 北風に ばけたので 急に寒くなる。
- (30) 北風が 南風に かわる。
- (31) 北風が 南風に 変化する。
- (32) 北風が 南風に ばける。

(27)~(29)と(30)~(32)を比較すると、<-Y>自身がカ格をとり得ることがわかる。これが、「かわる₂」の第一の特徴である。(26)(29)(32)が可能なのは、おとぎ話のように限られた場合のみについてである。次のような例文になると「ばける」はつかわれにくい。

- (33) 二十一年間にずいぶん 時代は かわりましたね。
- (34) 二十一年間にずいぶん 時代は 変化しましたね。
- (35)^x二十一年間にずいぶん 時代は ばけましたね。
- (36) 三年の間に A氏は かわった。
- (37) 三年の間に A氏は 変化した。

(38) × 三年の間に A氏は ばけた。

「かわる₂」・「変化する」は、だいたい同じような意味をもっている。しかし、「変化する」は、「かわる₂」より、かたいニュアンスがある。また、「変化する」は、「かわる」より、出発点と到着点の必要性が高い。たとえば、

(39) A氏は かわっている。

(40) A氏は 変化している。

(39)と(40)をくらべてみると、(39)の場合は、「A氏」が、以前のA氏に対して、近ごろのA氏は「かわっている」というように、出発点と到着点があることもあるが、「A氏」の性格を、標準とくらべて「かわっている」と表現しているときもある。「変化する」は、後者のような意味は、表わさない。この特徴は、これらの動詞を連体形にした場合によくあらわれてくる。

(41) これは かわった形の 時計ですね。

(42) これは 変化した形の 時計ですね。

(43) かわった色。

(44) 変化した色。

(45) かわった話。

(46) 変化した話。

(47) かわった人ですね。

(48) × 変化した人ですね。

(46)について説明を加えておこう。これはたとえば、ある地方で伝承されている民話などが、その後他の地方に違った形で伝えられているときなどに用いられるのではないかと思う。(48)はどうもすわりが悪いようだ。

(49) 三年前にくらべて ずいぶん 性格が 変化した人。

などのように、はっきりと出発点、到着点が文脈からわかる場合ならよいだろうが、(48)のような表現では、少し無理ではないかと思う。

以上の考察から、〈X〉〈-Y〉〈+Y〉がどのような現われ方をしているかをまとめると、次表のようになる。

	〈X〉	〈-Y〉	〈+Y〉
かわる・変化する・ばける	が		に
かわる・変化する	が	(から)	(に)
かわる・変化する・ばける		が	に

(から)(に)は、現われることも、現われないこともある。

5. 「ばける」再考

(5)と(7)では、〈X〉〈-Y〉〈+Y〉に相当するものに

違いがある。

	〈X〉	〈-Y〉	〈+Y〉
(5)	(〈+Y〉と同)	父に	私が
(7)	私が	(〈X〉と同)	父に

これを、それぞれが表わす意味とてらしあわせて考えてみよう。(5)の方では、「私」という一人の人間が「父」という他の人間にとりかわって目的をはたそうとするのに対し(7)は、「私」という人間が何か工夫をして「父」に変装していくこと、つまり〈X〉自身の変化を表わしている。よって〈X〉である「私」が、〈-Y〉である「私」から、〈+Y〉である「父」にかわるということであらわしている「ばける」は、「かわる₂」に近いといえることができる。

「ばける」は、構文的にみると、次のような表現をとることが、今までの考察からわかった。

〈X〉	〈-Y〉	〈+Y〉
が	(から)	(に)
が		に
	が	に

意味的に考えてみると、「ばける」は、ただ〈X〉が〈-Y〉から〈+Y〉に移行するというだけではなく、それに特別なニュアンスがつけ加わるという特徴がある。今までに出てきた「ばける」についてみてみよう。

(7)……意志性

(26)(29)(32)……擬人化

〈X〉が 有情物でない場合はどうだろう。

(50) 親が送った学費が みな娯楽費に ばけた。

(51) この株は 二倍に ばける。

(50)(51)の〈X〉は、本来意志的でないものだが、「ばける」を用いることにより、あたかも〈X〉に意志があるかのような感じをあたえる。またそのため、それらの出来事の意外性を表現している。

「ばける」は、構文的にも意味的にも「かわる₂」に近いといえる。しかし、「かわる₂」においては、〈X〉と〈-Y〉〈+Y〉の関係においては、それほどかけはなれたものではないのに、「ばける」の方は、〈X〉が〈-Y〉から〈+Y〉に移行するのに、飛躍を感じさせる。その飛躍のあり方によって、「ばける」の特別にもつニュアンスは表現されてくるのだろう。

言語経歴：1955年11月 東京都足立区生。

現在にいたる。